

ローマ 9：14-18

本日お読み頂いたローマの信徒への手紙 9 章では、それまでの 8 章でパウロが語ってきた「信仰による義」という本書の中心ともいえる教義をめぐる弁証に代わって、ユダヤ人の救いという新たな問題(テーマ)が取り上げられています。パウロは、これまでの手紙のなかでユダヤ人の優れた点をあげ、繰り返しそれを書き記してきました。3 章の 1 節では「では、ユダヤ人の優れている点は何か」と述べて、「それはいろいろ指摘できるが、まず、神の言葉が彼らにゆだねられたことである」と書いています。それは、神がご自身のことばを契約の民であるイスラエルに与えたということです。神は、もろもろの民の代表としてイスラエルを特別に選び、彼らに、モーセを通して律法を付与されました。こうして彼らは契約の民となった。さらに、そのユダヤ人の中から、イエス・キリストが生まれたのです。このように、優れた点をいくつも持っているユダヤ人が、なぜキリストの福音を拒否し、神の敵となってしまったのか、このことはパウロにとって重大な問題であり、同時に深い悲しみ、痛みの出来事でありました。自分が述べてきたように、すべての人が、イエス・キリストを信じる信仰によって義とされる、律法の行いは救われるための必要不可欠な条件ではない、ということになると、旧約の長い歴史はどうなるのか。律法を与えられたユダヤ人の救いはどうなるのか。そのことは、パウロにとって頭から離れることのない大問題だったのです。

この問題に対して、答えている箇所が本日の 9 章です。パウロは、その 6 節で言います。「ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません」その意味は、神の民であるイスラエルが見捨てられているような状態にある目下の現実もまた、神の御心のうちにある出来事だということです。そこにも、神の計画があるとパウロは考えているのです。それを説明するために、パウロは「神の選び」という概念を用います。それは、創世記に登場するエサウとヤコブの長子の特権をめぐる争いのなかで起こったことです。それは、現代版のお家騒動ともいえる出来事でした。アブラハムの子イサクには双子の息子たちがおりました。兄の名はエサウ、弟の名はヤコブといます。母親リベカは弟のヤコブを愛し、父親イサクはエサウを愛したと創世記 25 章 8 節にはあります。人間的にみると、兄のエサウは自然児で野性的ですが、無邪気で親切なところもある人物です。一方のヤコブは、利口で知恵が回る人物ですが、狡猾で、ずるがしこいところがる人物です。どちらが良いとは、すぐには言えません。しかし、結果的には、ヤコブがうまく立ち回り、母親と共謀して家督の権利を手に入れるのです。ヤコブはそのために兄に憎まれ、殺されそうになって、母親の故郷、パダン・アラムに逃亡するのであります。

このような、創世記の物語をよみながら、多くの読者はきっと思うことでしょう。なぜ、狡猾でずる賢い弟のヤコブが長子の権利を受け継ぐということを、神は、理不尽にも認められるのか。兄のエサウが可哀そうではないかと。わたしも初めて聖書を読んだときは、そう思いました。しかし、本日のローマ書 9 章で、パウロは、それは神の自由な選びによる計画だということです (12 節)。ヤコブが選ばれ、そこからイスラエルの系譜が続いてゆくことになったのは、ヤコブが人間的に優秀であり、彼が立派な行いをしたからではありません。そうではなく、それは神の主権に属する事柄だということです。ヤコブの選びは、神のご計画によるものであった。神が、人の世の混乱や矛盾、あるいは不条理とも思える出来事を超えて、それらのただ中で、恵みによる選び、恵みによる召しのわざを行われた。それは、人間の思いや、正義観や倫理をこえた、神の自由な、主権的な選びであります。

教会の出来事も同じではないでしょうか。自分でも思いますが、召命ということで申し上げれば、わたしにいったい何の功いさおがあつて牧師となり、神のみことばを取り次ぐことが許されているでしょうか。人間的に見れば欠けだらけ、思いやり、気遣い、人を愛することにおいてもまことに不十分な者であります。しかし、神はこのように未熟な者をあえて選び、反面教師として立てるということをなさるお方なのだと、私は信じたいのです。スイスという国があります。ヨーロッパで唯一の永世中立国であるこの国を、ある神学者は次のように言います。「スイスは、神の摂理と人間の混乱によって支えられている」ヨーロッパの歴史は、戦争で塗りつぶされた歴史でありました。高校の世界史の本を開いてみると分かります。大きいところで、100 年戦争、ドイツ農民戦争、30 年戦争、ナポレオン戦争、普仏戦争、そして、二度にわたる世界大戦、これら人間の罪がもたらす混乱の只中で、スイス国民は学び、永世中立国となることを選び取りました。わ

わたしたちの日常生活のなかにも、ただ混乱としか言えないような出来事が頻発しているのではないのでしょうか。しかし、信仰のまなざしを持ってそれをみれば、わたしたちは望みをもつことができます。なぜなら、そこにも、神の恵みのご計画があると信じる信仰が成立するからです。だとすれば、私たちは神のなさる御業を、それが私たちにとって納得がいかないものであっても、それを神の御心と受け止め、謙虚にそれを受け入れるということを学ばねばならないと思うのです。一つ一つの出来事に、神さまの意思を見て取るということ、それは大切なことであります。

去る6月第2週の日曜日、私どもはとても危険で怖い経験をしました。礼拝が終わったその日の午後、私どもは栗ヶ沢教会の役員の皆さまと今後の予定について話し合うために、車で東京外環道の高速を使って移動しました。妻が運転をしていました。和光市にはいり、トンネルのなかを移動していたときです。前の車が、突然車線を変更して、まん中の車線から右側車線に入りました。前の車がいなくなったあと前方をみると、そこに金属のはしごが横たわっていたのです。妻は、はしごに気が付き、急遽、車を右側車線に乗り入れたのですが、後ろの車から大きなクラクションが寄せられた。あわや、大事故につながりかねない出来事で、本当に怖い出来事でした。(もしも、わたしが運転していたら事故を起こしていたかもしれません。)このことを通して、私たちは学びました。今後、高速での移動はできる限り避けて、電車を使うようにしようとか、安全運転をしようとか、神さまは、私どもの命を守ってくださったとか。結局のところ、この事を通して、神の前に謙遜になることを思い知らされたのです。

東京神学大の近藤勝彦という組織神学の先生が、日本基督教団のある教会から、特別伝道礼拝の講師として招かれ、その日の礼拝で説教をかたった時のことです。説教が終わったあと、お昼の愛餐会の場面で、その教会のひとりのご夫人から次のような質問を受けました。「先生は、さきほどの説教のなかで神の御心について話されました。ところで、私には息子がおりましたが、難病を患った末に20代の若さで先立って行きました。先生、このことも神の御心なのではないでしょうか？」そのような質問です。近藤先生は、しばらく沈黙した後、「そのことも神の御心であると受け止めることができる信仰を持ちたいものですね」と答えたと言います。先生は続けて言われます。「いくら神に祈っても、願い求めることが叶えられないということは、信仰生活のなかでしばしばあるものだ。もし、自分の願い求めることを満たしてくれた時だけ神の御心になったのであれば、神が、祈りに応えてくれないとき、私たちはどうやって信頼することが出来るだろうか？」と。神の前に謙遜になるとは、すべての事において神の主権を認めることです。たとえ、祈りが聞き入れられなくとも、そこに主の計り知れない御計画があることをさとり、そこにも神の恵みがあることを信じること、神を信じるとはそういう事ではないでしょうか。

本日の箇所を根拠にして、宗教改革者のジャン・カルヴァンという人は有名な「二重予定説」を唱え、後世の教会に大きな影響を与えました。最後にこの事について考えてみます。カルヴァンの二重予定説とは、次のような主張です。「永遠の選びについて、神はこれによって、あるものを救いに、あるものを滅びに予定したもう」カルヴァンは、続けて言います「神は、万人を無差別に救いの希望のうちに入れたまうのではなく、あるものに対しては拒否し、あるものには与えたもうという対比(コントラスト)を通して、神の恵みを明らかにするのである」(キリスト教綱要Ⅲの2より)。神によってある者は救いへと予定され、ある者は滅びへと予定されている、とカルヴァンは言うのです。たしかに、聖書のほかの箇所でも、永遠の救いと永遠の罰とが書かれている箇所があります(マタイ25章)。しかし、このカルヴァンの主張は、パウロの意図を正しく理解していないのではないかとわたしは思われています。なぜなら、次の段落の陶器師のところを読んでください。陶器師は、自分の作品を良い物と悪いものに選別します。そして、悪いものは投げ捨てて壊してしまいます。しかし、9章22節で「怒りの器として滅びることになっていたものを寛大な心で耐え忍ばれた」とあります。壊したりしないのです。神は、すべての民が悔い改めるその日を待っておられる、というのがパウロの主張ではないでしょうか。さらに、11章でパウロは、異邦人を野生のオリーブの木に実立て、あなたがた異邦人が元の木に接ぎ木されていま成長しているなら、はじめからついていた枝であったユダヤ人が、元の木に接ぎ木されたら、どれほどたやすく実を結ぶことだろうとのべて、ユダヤ人の救いを待望しています。さらに、11章32節で「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それはすべての人を憐れむためだったのです」という。すべての人の救いをパウロは待望しているのです。それが、パウロの主張、神学なのだとなつては思いません。皆さん、わたしの主人は神の選びから漏れている、などと決しておっしゃらないでください。その判断は人間がくだすことではありません。陶器師である聖書の神さまは、作った作品を決して壊したりしないお方です。その事を信じて、すべての人の救いを祈り続ける

ものでありたいと、思わされるのであります。

お祈りいたします。